

ノーサイド

北原巖男

も拘わらずこれからも読んでほしい古本は送り続ける、その方の信念には微塵の揺らぎもなきような気配を感じます。

その後、彼どのような古本授受共同作戦を展開しているかは不明。今のところ、奥様に気づかれることなく功を奏しているようです。

曰く、「古本を探し出す。読んでもらいたい人に贈る。私の楽しみなのです。要らなくなったら、自由に処分してもらえばいいんです」

「もう主人に古本を送ってこないでください。置くところもないし、本の重さで家がつぶれてしまいませんか！」

怒られましてね、とチェンソーカーのその方は、いたずらっぽい表情を見せながら新しいタバコに火をつけました。奥様の悲鳴に

「それぞれ行先が決まっている本たちです」この人

にはこの本を、あの人には偶然からでした。作業に欠かせない7種類の必需品。

まず、「歯ブラシ」で本に着いたゴミやホコリを、表は勿論、各ページごとに綺麗に落として行きます。

自身、大の読書家。読むのも速い。そして、本の持つ無尽の力を通じた人材育成に力を注ぐ。尽くして求めず。この一徹な性格の持

横積みの古本

をかける。これようやく完成。

新しい持ち主の元に向かうため横積みされた古本は、この手間暇かけた一連の作業を完璧に終えた本たちばかりだったのです。

その方とのご縁に恵まれて以来、私の読書量も、無を言わせず増えていきます。難しくても良く分からないうちもありません。他方、内容に引き込まれ一気に読了することや新たな出会いや発見に興奮することも、今まで一顧だにできなかった事柄について、興味や関心を持ち始めた自分の変化にも驚きます。その方が考える私に必要な古本の魔術でしょうが。

「はい。ありがとうございます！」

妻が覗んでいます。

「それは、約半世紀の間、毎週金曜日の午後の時間を東京神田の古書店巡りのために先取りし、全てのスケジュールに優先させて来ました。それだけではありませぬ。古本を持ち帰るや否や、ある作業に没頭して来ていたのです。このことを知ったのは、つい最近、全くの

「それは、約半世紀の間、毎週金曜日の午後の時間を東京神田の古書店巡りのために先取りし、全てのスケジュールに優先させて来ました。それだけではありませぬ。古本を持ち帰るや否や、ある作業に没頭して来ていたのです。このことを知ったのは、つい最近、全くの

北原 巖男
(きたはらいわお)
元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現(一社)日本東ティモール協会会長。(公社)隊友会理事

油から本を守るため、「セロハン紙」で表紙にカバー